大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

児童養護施設退所者の幸福度に影響する施設ケアに関する検証：施設退所者アンケート調査結果からの考察

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2019-03-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 伊藤, 嘉余子, 高橋, 順一
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003017

【論　　文】

児童養護施設退所者の幸福度に影響する施設ケアに関する検証

―施設退所者アンケート調査結果からの考察―

伊藤　嘉余子[1)]　高橋　順一[2)]

1）大阪府立大学人間社会システム科学研究科

2）同志社大学大学院社会学研究科博士後期課程

要　　旨

本研究では、施設を退所した当事者の生活状況や意見から、施設退所前に行われるべき支援やケアのあり方について考察することを目的としてアンケート調査を実施した。

その結果、経済的な問題や対人関係の問題を抱えて生活している者が多いことが明らかになった。さらに、現在の幸福度に影響を与える因子について分析した結果、結婚し新しい家族をつくることができている人ほど強い幸福度を感じながら生活をしていることがわかった。あわせて、経済的な問題や対人関係の問題も幸福度に影響を与えることが示唆された。

キーワード：児童養護施設、退所者支援、リービングケア

1．研究目的

保護者からの虐待や育児放棄、経済的困難などを理由に、実家庭から離れて、児童養護施設や里親家庭等の社会的養護のもとで生活する子どもたちが、全国に約45,100人いる（母子生活支援施設を含む．2017年度末現在)。こうした子どもたちは、社会的養護を巣立った後も、実親からの物質的な支援および精神的な支援を受けることが困難な場合が少なくない。厚生労働省（2016）によると、児童養護施設入所者の約６割が、保護者等から虐待を受けた経験をもつ。虐待を受けた経験のある人は、虐待加害者のみならず、あらゆる人との信頼関係を構築することが困難であると言われている（Kenward & Hevey：1992)。また、被虐待経験の有無にかかわらず、施設から巣立つ者の多くが、施設退所後に人間関係の構築や維持が困難で悩むことが多いと複数の先行研究で指摘されている（白井：2013、伊部：2013、山田 2008など)。

また、親からの支援を受けられないだけでなく、新たに親・親族の困難やトラブルに巻き込まれることもある。久保原（2016）によると、年齢による施設在所期限によって「自立」退所する者の多くが実親を頼ることができず、身近な相談者をもたずに社会生活を送ることを余儀なくされている。

いわゆる実家機能をもたずに社会で生活せざるを得ない社会的養護出身者にとって、施設等を巣立った後に、施設が「実家」に代わる資源として行うべき支援（アフターケア）について検討することは重要である。しかし、アフターケアだけではなく、施設を退所する前、入所中にどのような支援や養育、ケアを受けておくことが必要なのかについて検証し、インケアを充実させることによって、施設退所後に直面する課題や困難を軽減したり予防したりできるのではないかと考える。

そこで本研究では、施設を退所した当事者の生活状況や意見等から、施設退所前に行われるべき支援やケア

の在り方について考察することを目的とした。

２．研究の視点および方法

（１）調査の方法

2007（平成19）年４月１日から2017（平成29）年３月31日までの10年間に、Ａ自治体が所管する児童養護施設から中卒以上で自立退所した者を対象に調査票を郵送し、郵送にて回収した。

調査票の郵送に際しては、児童養護施設等の協力を得て、児童養護施設が連絡先を把握している退所者に対して調査票を発送した。

（２）調査の内容

主な調査項目は以下のとおりである。

①回答者の基本属性（性別/年齢/入所期間/退所時期など）
②現在の生活（基準日2017年７月）
③施設生活について
④施設退所の前後について
⑤退所後の進路について
⑥現在の社会生活について
⑦出身施設との交流について

（３）本報告の分析の視点と方法

本報告では、施設退所者の幸福度に関する回答内容と、幸福度に影響を与えた要因に関する分析結果を報告する。

幸福度については、現在の幸福度について10点満点で回答を求めるとともに、その理由を自由記述で尋ねた。幸福度の理由についてはテキストマイニングを行った。テキストマイニングには、kh corderを用いた。

幸福度に影響する因子については、サンプル数を勘案し、実践的で幅広い知見を得るためにシンプルな解析方法を採用し、相関分析（スピアマンの順位相関係数）を実施した。分析には、SPSS Statistics 24.0を使用した。

３．倫理的配慮

本研究は、大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科設置の倫理審査委員会の承認を得て実施した。具体的には、匿名化した上でのデータ処理、調査結果の公表の際に個人が特定されない配慮などを行った。

４．研究結果

（１）回収率と基本属性

292名に送付し、77名の回答を得た。回収率は26.4％である。性別は女性46名（59.7％）、男性30名（39.0％）であった。回答者の年齢は20～24歳が43名（55.8％）と最も多く、平均年齢は22.6歳であった。

施設退所後の現在の住居地については「Ａ自治体内」が50名（65％）と最も多かった。Ａ自治体外は26名（34％）であった。

回答者の退所時年齢については「18歳」が30名（39.0％）と最も多く、全体の４割弱を占めた。「20歳以上」

は13名（16.9％）であった。最少年齢は12歳、最高年齢は21歳、全体の平均は17.8歳であった。

回答者の退所理由としては「自立」が39名（50.6％）と最も多く、全体の約半数を占めた。家庭復帰は18名（23.4％）であった。

退所後の進路では「就労」が最も多く37名（48.1％）で、次いで「進学」20名（26.0％）であった。

最後に退所した児童養護施設以外の施設入所経験について尋ねたところ、２か所以上の措置経験（施設・里親を含む）をもつ者は13名で全体の約17%であった。その内訳は表２のとおりである。回答者の社会的養護経験年数の平均は8.4年、児童養護施設のみの在籍年数は平均8.0年であった。全国平均よりも長く施設で生活している子どもが多く回答しているといえる。

なお「児童心理治療施設」が０名だったが、これは施設の名称変更に配慮せず調査票を作成したため、この選択肢と「情緒障害児短期治療施設」が同一施設だと考えなかった回答者が一定数いた可能性がある。

（２）現在の就労状況や進路

最終学歴として最も多かったのは「高等学校卒」34名（44.2％）であった。「専門学校卒」「短期大学卒」「四年制大学卒」の合計が15.6%であり、一般家庭の大学等進学率（大学短大進学率（現役）54.8％、専門学校進学率（現役）16.3％よりもずっと低い現状が明らかになった。

次に就労状況である。2017（平成29）年７月現在の就労状況については「働いている」と回答した者が48名（62.3％）と最も多かった。一方「働いていない（主婦/主夫を除く）」は13名（16.9％）であった。

働いている者の雇用形態については、正規雇用が最も多く25名（49％）であった。その一方で、「派遣・契約社員」「パート・アルバイト」の非常勤雇用の者も4割超を占めた。

（３）経済状況

働いている者に１カ月の手取り収入を尋ねたところ、「15～20万円未満」が18名（35.3％）と最も多く、次いで「10～15万円未満」13名（25.5％）であった。

現在の貯金額については「０円」が15名（19.5％）と最も多く、10万円未満を合計すると44.2％となり、十分な貯金が困難な厳しい経済状況で生活している者が多いことがうかがえる。その一方で、100万円以上貯金できていると回答した者が９名（11.7％）いた。

生活保護の受給経験等については「受けたことがない」が最も多く54名（70.1％）であった。一方、「受けたことがある」は８名（10.4％）、「受けている」は７名（9.1％）であった。

施設退所時の所持金については、「５万円未満」が最も多く15名（19.5％）であった。次いで「５～20万円未満」12名（15.6％）、「20～50万円未満」９名（11.7％）であった。

（４）住居や同居家族など

現在の住居の種類については、「賃貸住宅」が最も多く、26名（33.8％）であった。次いで「持ち家」16名（20.8％）であった。

現在、同居している人の数としては「一人暮らし」が21名（27.3％）と最も多かった。次いで「５人以上」17名（22.1％）であった。

現在の同居人については「なし（一人暮らし）」が21名（27.3％）と最も多かった。

同居人がいる者の回答の中では「配偶者」と「きょうだい」が最も多くそれぞれ12名（15.6％）であった。多かった「その他」の内訳としては、グループホーム利用、寮、施設に下宿等があった。

（５）借金の有無

借金経験については56名（73％）が「ない」と回答した。

借金経験が「ある」と回答した21名（27％）に借金金額を尋ねたところ「20～50万円未満」が最も多く５名（23.8％）であった。

借金したことのある回答者に借金の理由を尋ねたところ「給料が少なかった・減ったから」と「遊ぶお金に使ったから」が最も多くそれぞれ４名（19.0％）であった。

「その他」を選択した10名の内訳は「奨学金」が５名、「車のローン」「病気の治療費」「生活費として」「転居費用」「職場での訓練費用」が各１名ずつであった。

（６）施設退所後にまず困ったこと

最も多かったのは「孤立感・孤独感」27名（35.1％）で、次いで「金銭管理」24名（31.2％）であった。「生活費」と回答した者が20名（26％）おり、経済面での困難を抱えながら生活している状況がうかがえる。

また「住民票等の手続き」「健康保険等の手続き」「保証人の確保」もそれぞれ２割超の回答があり、社会生活上必要となる手続きで困難を感じている回答者がいることがわかる。

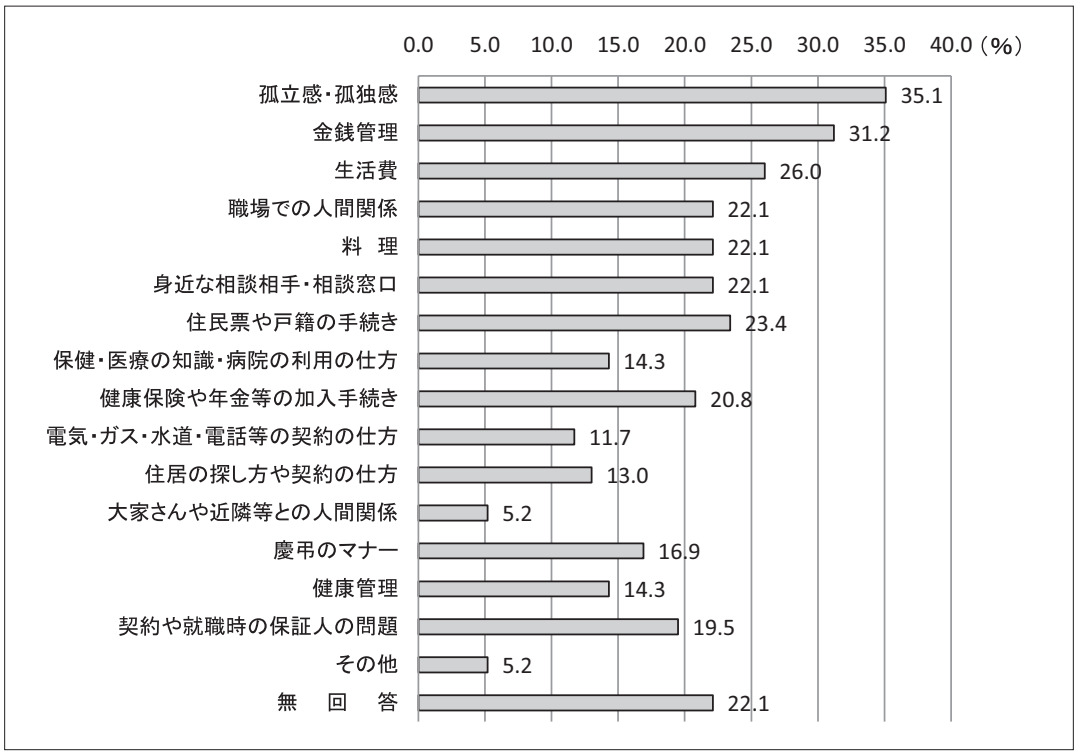

図１　施設退所後にまず困ったこと（MA）

（7）現在、困っていること

「生活全般の不安や将来のこと」が“困っている”“少し困っている”を合わせて29名（37.7％）と最も多かった。次いで「生活費等経済的な問題」28名（36.4％）、「家族・親族のこと」20名（26.0％）であった。

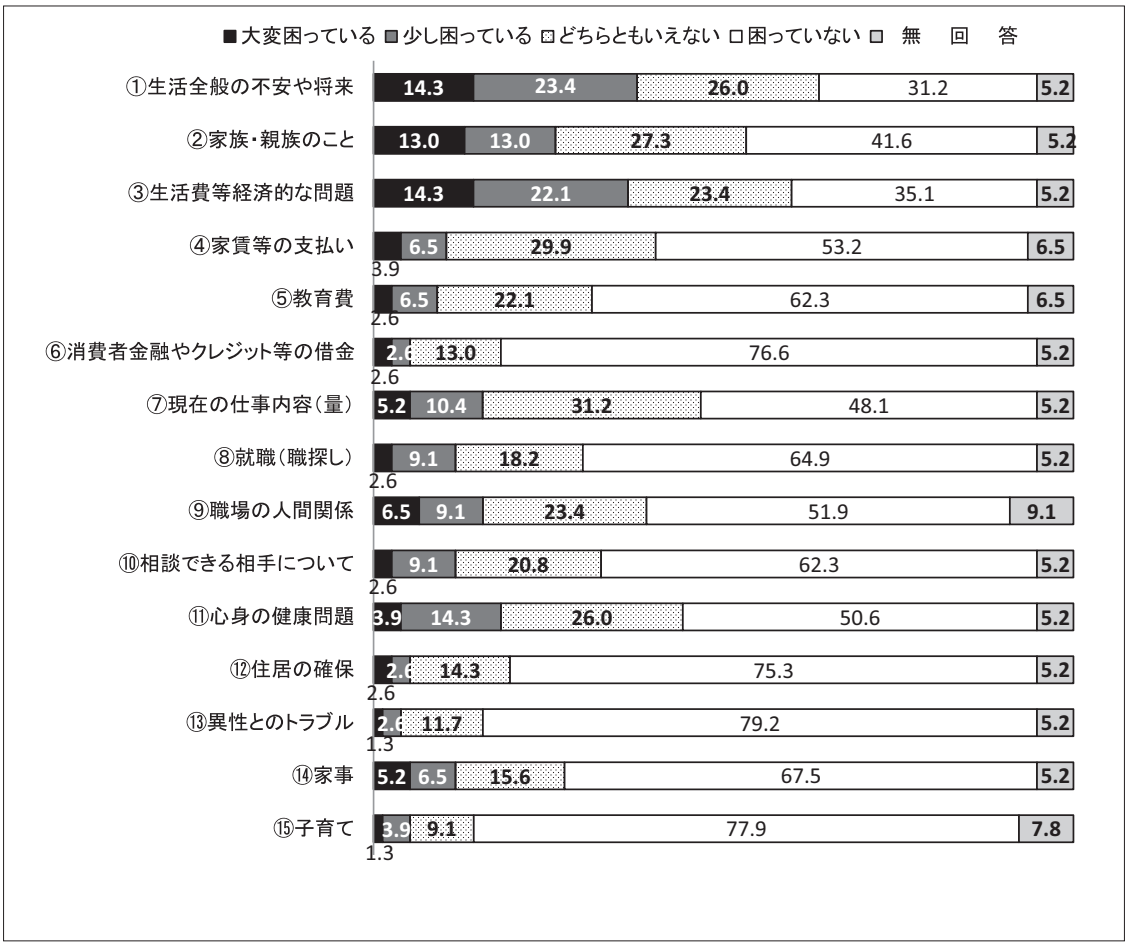

図２　現在困っていること

（8）施設入所中に身についたと思うもの

施設入所中に身についたと思うものとして、最も多かったのは「掃除・洗濯」で45名（58.4％）であった。また「基本的な生活習慣」は41名（53.2％）で、半数以上が“身についた”と回答したのはこの２つの項目のみであった。

３番目以降は「社会生活上のマナー・ルール」33名（42.9％）、「コミュニケーションのとり方」と「交通機関の利用の仕方」がそれぞれ29名（37.7％）と高い割合で“身についた”との回答が得られている。

一方、退所直後に困ったこととして回答の多かった「金銭管理」について、“身についた”の回答は13名（16.9％）のみであった。

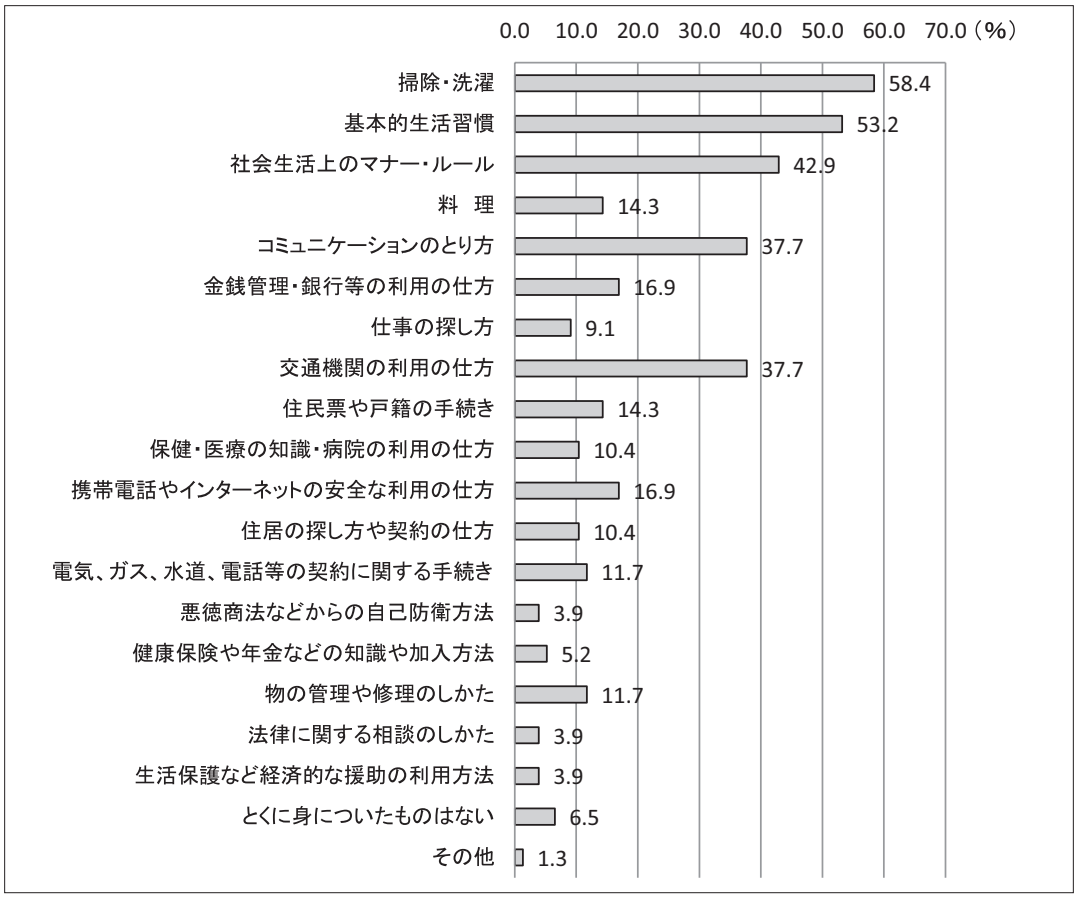

図３　施設入所中に身についたと思うもの

（９）現在の生活への満足度と幸福度

現在の社会生活の状況に対する満足度を尋ねたところ、最も多かったのは「少し満足している」で39名（50.6％）と約半数であった。

「とても満足している」「かなり満足している」の２つを合計しても19名（24.7％）であり、多くの人があまり満足していない状況が明らかになった。

現在の幸福度について10点満点で回答を求めたところ、最も多かったのは「５点」17名（22.1％）で、次いで「10点」15名（19.5％）であった。平均は6.57点であった。

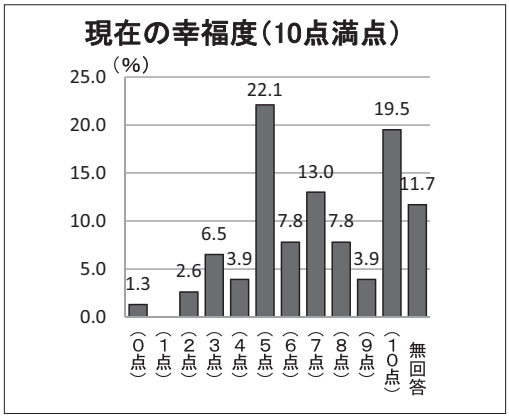

図４　現在の幸福度

(10) 幸福度の理由の共起ネットワーク

幸福度の自己評価点数の理由に関する自由記述をテキストマイニングによって共起ネットワーク分析を行った結果、以下の６つのコミュニティが抽出された。6つの共起ネットワークの要約は表のとおりである。

表１　共起ネットワークで抽出されたコミュニティの要約

1	結婚して、子どもができて、新しい家族と暮らせて恵まれているし、幸せだから。信頼できる職員や先生に相談に行くことができて、恵まれているから。
2	進学したかったけどできなかったから。あるいは、進学できたけど人間関係が難しく、結果的に学校をやめることになったから。
3	卒業後、自分で働いて、暮らしていけるか、親のこともあって、不安だから。
4	施設にいた当時は辛くて早く出たかったが、今は、施設で育った方が環境が良かったと思うから。
5	毎日が楽しいから。
6	昔の父母と同じ歳になった現在、普通に家庭をつくって、仕事に就くことができたから。

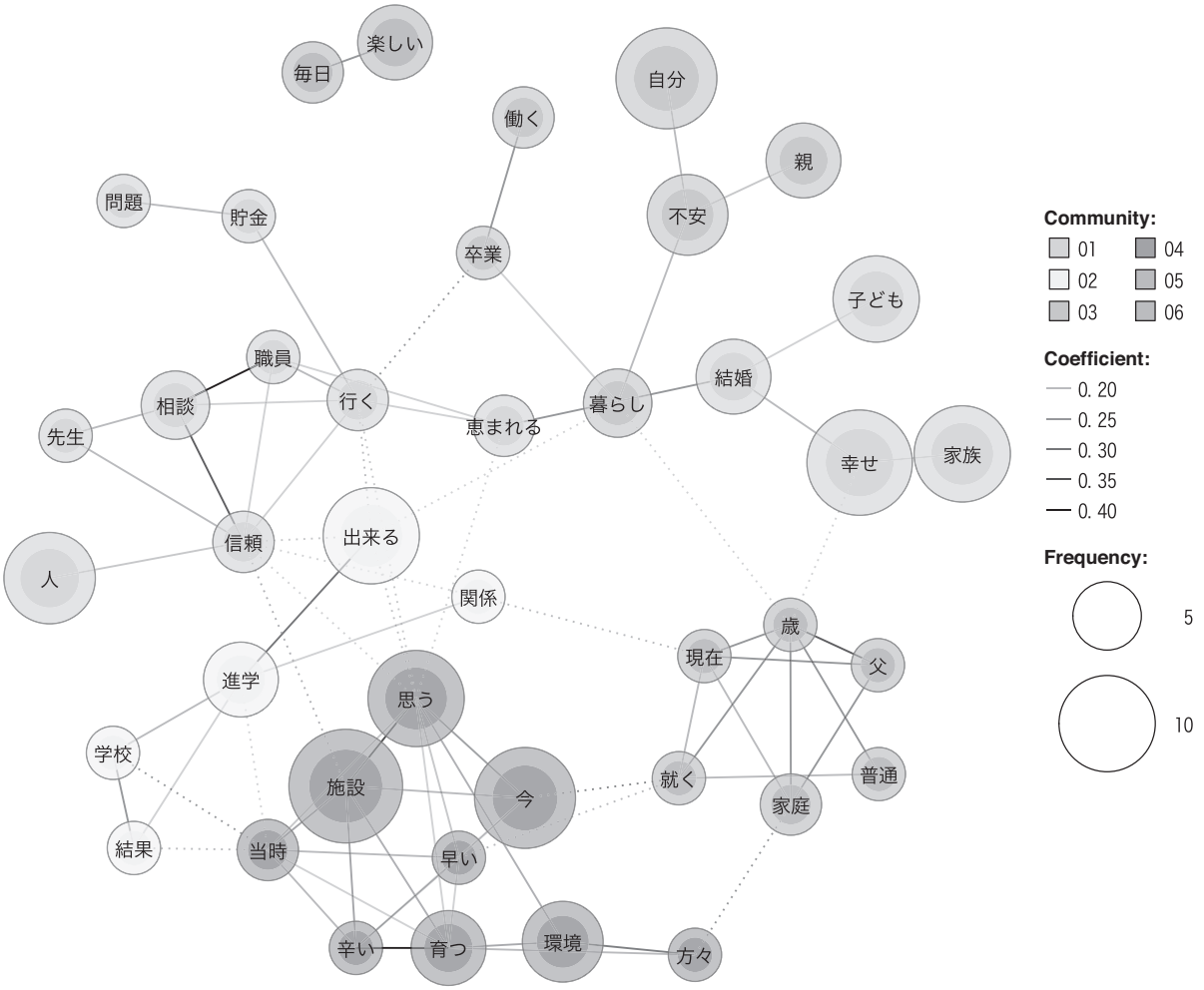

図５　幸福度の理由の自由記述：共起ネットワーク

（11）現在困っていることと幸福度との関連性

先述した解析の結果、以下の内容が示唆された。

＜経済的な問題＞

• 生活費等経済的な問題に困っていない人ほど、幸福度が高い。

• 家賃の支払いに困っていない人ほど、幸福度が高い。

• 消費者金融等の借金で困っていない人ほど、幸福度が高い。

＜職場以外の人間関係＞

• 相談できる相手に困っていない人ほど、幸福度が高い。

• 家族や親族のことで困っていない人ほど、幸福度が高い。

• 異性トラブルで困っていない人ほど、幸福度が高い。

＜健康問題＞

• 心身の健康問題を抱えていない人ほど、幸福度が高い。

＜住居や家事など生活＞

• 住居の確保に困っていない人ほど、幸福度が高い。

• 家事に困っていない人ほど、幸福度が高い。

＜仕事関係＞

• 現在の仕事内容や新しい職探しに困っていない人ほど、幸福度が高い

• 職場の人間関係に困っていない人ほど、幸福度が高い。

表２　現在困っていることと幸福度の関連性

現在困っていること（困っていない）	幸福度との相関係数
①生活全般の不安や将来のこと	0.621 **
②家族・親族のこと	0.361 **
③生活費等経済的な問題	0.445 **
④家賃等の支払い	0.299 *
⑤教育費	0.237
⑥消費者金融やクレジット等の借金	0.263 *
⑦現在の仕事内容（量）	0.310 *
⑧就職（職探し）	0.358 **
⑨職場の人間関係	0.306 *
⑩相談できる相手について	0.450 **
⑪心身の健康問題	0.406 **
⑫住居の確保	0.439 **
⑬異性とのトラブル	0.310 *
⑭家事	0.489 **
⑮子育て	0.075

$^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$

５．考察

以上の結果から、今後取り組むべきインケアやリービングケアとして、以下の内容への配慮や工夫が示唆された。

（1）結婚観・家族観を涵養できる生活

調査結果から、施設退所後に結婚し「新しい家族」をつくれたかどうかが、退所者の現在の生活満足度や幸福度に大きな影響を与えていることが示唆された。しかし、施設で生活する子どもの中には、施設入所前の家族生活や家族関係に傷ついた経験をもっており、必ずしも「結婚」や「家族」等に対して肯定的なイメージをもっていない者も少なくないと考えられる。そのような彼らにとって「自分の親にはできなかった、新しい家族をつくり幸せに暮らしていること」は、かつて傷ついた自分自身への自信を取り戻し、自己肯定感を高めていく一つの契機になるのではないだろうか。

社会に出る前の施設生活の中で、家族や結婚に対する肯定的なイメージを自分自身の成育歴と紡ぎながら涵養できるライフストーリーワークのような取り組みの重要性が、今回の調査結果からは示唆されたといえよう。

（2）金銭管理の練習や経済的支援の情報提供

幸福度に影響を与える因子として、「借金がない」等の経済的な要因も大きいことが本調査結果から明らかになった。ここから、施設入所中に必要な支援として、金銭管理の練習の機会や経済的支援に関する十分な情報提供の必要性が示唆されたといえる。

（3）退所後も施設に相談できる関係性や体制の構築・整備

幸福度の自己評価点数の理由に関する自由記述の中で「いつでも相談できる施設職員の存在」が幸福度に大きな影響を与えていることが明らかになった。また相関分析では、相談できる人がいない人ほど幸福度が低いという結果になった。これらの結果から、施設退所後も施設に来て職員にいつでも相談できる関係性を築いておくことの重要性が明らかになったといえる。心身の状況や住宅、家事、仕事、家族関係など種々の生活に関する相談を行い、不安を軽減し、幸福度の維持・向上を図ることが求められる。またあわせて、退所した者へのアフターケアを有効に行うためには、退所者のことを子どもの頃から良く知っている養育者が継続して施設に勤めていることが重要になることも調査結果から示唆された。そのため、各施設において「施設職員が働き続けることのできる職場環境の整備」が必要であるといえよう。

（4）対人関係スキルやストレスマネジメント等の力の育成

クロス集計から、「職場の人間関係」や「異性トラブル」等の対人関係に関するものが幸福度に影響を与えていることが明らかになった。施設に入所している時から、上司など年上の人間との距離のとり方や礼儀作法に加え、対人関係でストレスを抱えた時のセルフメンタルケアの手段や方法等についても、少しずつ伝えていくことの必要性が示唆されたといえよう。

謝　辞

本調査研究にご協力いただきました、自治体、施設、退所者の皆さまに深謝いたします。ありがとうございました。

参考文献

- Kenward, H. & hevey, D（1992）“The effcts of physical abuse and neglect” Child Abuse & Neglect, B.T. Batsford Ltd, 203-209.
- 伊部恭子（2013）「施設退所後に家庭復帰した当事者の生活と支援」『社会福祉学部論集（佛教大学）』(9).
- 伊藤嘉余子（2013）「満年齢で措置解除となった児童養護施設退所者へのアフターケア：支援内容と支援時期との関連性の検証」『社会問題研究（大阪府立大学）』(62).
- 久保原大（2016）「児童養護施設退所者の人的ネットワーク形成：児童養護施設退所者の追跡調査より」『社会学論考』(37).
- 小田川華子（2014）「自己肯定感向上の契機からみる児童養護施設」『同志社社会福祉学』(28).
- 白井絵里子（2013）「いま日本で若者が自立するということ」『里親と子ども』(8).
- 山田勝美（2008）「児童養護施設における子どもの育ちと貧困」，浅井春夫他『子どもの貧困』明石書店.

Verification concerning facility care that affects happiness level of care leaver from residential child care home: Consideration from the survey of care leaver

Kayoko Ito[1], Junichi Takahashi[2]

1）Osaka Prefecture University
2）Doshisha University Graduate School

Abstract

In this study, a questionnaire survey was conducted with the aim of considering how the support and care should be provided before leaving the residential child care home, based on the living conditions and opinions of the care leaver.

As a result, it became clear that many people living with problems such as economic problems and interpersonal relationships. Furthermore, as a result of analyzing the factor that affects current happiness level, we found that people who are married and able to make a new family live while feeling strong happiness. In addition, it was suggested that economic problems and interpersonal relationships also affect happiness level.

Key Words: residential child care home, support for care leaver, leaving-care